

氏 名 ^{くら}倉 ^{みつ}光 ^{おさむ}修
 学位(専攻分野) 博 士 (教育学)
 学 位 記 番 号 論 教 博 第 87 号
 学位授与の日付 平成 12 年 1 月 24 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 学習や仕事に対する動機づけを向上させる要因に関する研究
 ——心理療法とその教育的応用を通して——

論文調査委員 (主 査) 教 授 岡 田 康 伸 教 授 藤 原 勝 紀 教 授 東 山 紘 久

論 文 内 容 の 要 旨

第1章では、著者の立場を明らかにし、Garfieldを基に従来の心理療法には、多様なアプローチがあることや、ある学派にもさまざまなアプローチが存在しており、錯綜していると文献レビューする。著者は従来の仮説検証するパラダイムではなく、著者の実践から抽出されるものを大切にし、次の事例に生かすことが目的であると述べる。また、分化した心理療法の学派を超えて共通する心理療法の要因を統合することを目指すことを明らかにする。

第2章では、心理的問題の発生と克服に関して、「心の傷」と「心の病」と「個人的当為」という3つの概念で、説明しようとする。これは心理療法の過程を微分して、説明しようとする試みでもある。著者は「心の傷」を従来からいわれている心的外傷よりも広い概念で捉えていることを明らかにし、「困難な環境を知覚、または、イメージしたときの心理的苦痛」と定義する。また、「心の病」を「通常環境において、社会生活の支障となる心理的反応」と定義する。そうして、「心の病」は「心の傷」の苦痛を伴うイメージの実現化ないし意識化を回避しようとしたり、傷つけられる欲求を満たそうとする機能を持っているという。したがって、「心の病」の克服は「心の傷」の明確化から始まり、明確化すると「心の傷」の治療になると考える。すなわち「心の病」の克服は「心の傷」に対する適切な対処方略を取ることという。

心理療法の過程は、欲求を「症状」や「問題行動」以外の方法で満足させるか、その欲求の十分な満足を諦め、倫理的欲求に基づく個人的当為を実行するかのどちらかであると主張する。これらの過程をポジティブ・フィードバックは促進すると考える。このような一連の考えの妥当性を明確にすることを論文の目的とするという。第3章では心理療法の自験例で、第4章ではオーダーメイドテストで、実証しようとした。

第3章では、3つの事例を示す。1例目は、14歳男性の不登校の事例である。中学1年生から3年生まで、ほとんど登校せず、3年生から心理療法を5年間実施して、自立していった。心理療法の内容はほとんど野球をし続けた。このケースでは、「心の傷」は、軽い脳性麻痺が在ることで、「ちょっと非難される感じ」を抱いて、劣等感をいだいていたことと、中学校での同級生から攻撃され、いじめられていたことであろう。「心の病」は、「心の傷」によって、不登校になっていたことである。心理治療によってセラピストとの間で心の傷が共有され、心の傷のイメージやその心の病が表明され、これによって個人的当為が自然に浮かび上がってきたという。それは、中学卒業検定試験の合格や高校入学試験の合格であった。2例目は、大学生男性のスチューデント・アパシーのケースである。179回におよぶ心理療法が実施された。「心の傷」としては、父親との関係があり、また、父親との共通の疑問「科学は人のためになるか」があり、高校は優秀であったが大学に入学し、得意であった数学がわからないという挫折がある。「心の病」としては学業に身が入らず留年、そうして転学部、やる気がおこらないなどの症状呈していた。心理療法を実施していく中で、父親の死や、以前に思いをいだいていた女性との再会、恋愛という事態の出会い、クライアントは個人的当為として、働くことを認めることができた。さらに、著者は、以前の女性との出会いや、セラピストとの再会など、不思議なことが起こったケースであったと述懐している。3例目は、転職を繰り返した22歳の女性、会社員のケースである。主訴は「作事中に急に体が硬くなったり、耳が聞こえなくなったりする」ということである。特記事項としてクライアントが5歳の時実母が29歳で死亡し、7歳で父の再婚がある。132回に及ぶ5年間

の心理治療過程が示され、考察されている。「心の傷」は母親の死であり、父親の再婚によって助長された。「心の病」は過食や緊張であり、それがまた、心の傷となるという悪循環が繰り返された。クライアントの好きな自然が支えとなり、自然と接触できる牧場での生活を望んでいたのが、結婚で可能となった。ここに、クライアントの個人的当為があり、結婚とともに終結した。

第4章は、教育場面での応用と題され、オーダーメイドテストに関しての、4つの試みがしめされている。オーダーメイドテストとは、学習者が、テストの問題や出題範囲を指定して行うテストである。第1節は小学生に対する試みである。著者が適応指導教室の臨時の教師として、1週に1回、1回3時間出向いて、勉強をみたP子のケースが報告されている。P子が教師に救える事があることがわかり、P子の優越欲求における傷つきが和らいだ。これらがP子に学習への動機づけを喚起したと推測している。第2節は、中学生に対する試みである。中学2年生（女子24名、男子9名）のオーダーメイドテストが不得意科目の内発的動機づけに与える影響を調べている。SD法や自由記述法から、不得意科目に対するイメージが幾分改善されていることがうかがえる。第3節では、高校生に対する試みが示されている。オーダーメイドテストをする群（実験群：高校2年生男子41名）としない群（統制群40名）とを比べ、両群に成績の伸びに差があるかを調べた。この結果、実験群が有意に伸びがあることが示された。また、低成績群の方が伸びは著しかった。第4節は、大学生に対する試みである。学生が自分の選んだ学習領域からテストを作成し、それを授業中に、隣席の学生に解かせ、テスト後、その学生に解答を教える。被験者は私立大学2回生（男子21名、女子30名計51名）である。学生のこの試みに対するレポートから、学習に対する内発的動機づけを高めていることを明らかにした。

第5章は総合的考察と新たな仮説の生成と題づけられ、本論文について総合的考察がなされている。

論文審査の結果の要旨

倉光論文の審査の結果は次の通りである。著者は、仮説を検証するという従来のパラダイムではなく、「ある事例において有効だった要因を適切に抽出することができれば、別の事例において、より有効性の高いと思われるアプローチが仮定できる。すなわち事例に即した柔軟な仮説を新たに生成できる」という立場にたつことを明確にする。これは、中村雄二郎や河合隼雄の考えに共鳴し、それを推し進めようとする立場である。ここから、本論文で「臨床の知」の一端でも示そうとした意図は、それなりに達成しているといえよう。

一方、心理療法が、さまざまな立場に分化し、さらに、ある学派も多数に分派されていることを文献によってレビューする。そして、そういう分化の方向ではなく、今日、大切なことはそれらを統合することであると説く。そのキーワードとして「動機づけ」をもってきたのは著者のアイデアである。「動機づけ」は人間の行動を説明するものとして重要な概念であることは心理学では、余りにも自明のことであるが、心理療法では、余り問題とされていなかったか感じであるから、その目のつけどころは評価できる。さらに、動機づけに大切なことは、ポジティブフィードバックであることを主張する。

また、心理療法の過程が説明される時、余りにも飛躍が多く、名人芸的なことで、片づけられていた嫌いがある。これを少しでも誰にでも分かり易くするために、また、従来の考えを少しでも超えようとして、著者は、心理的な問題を「心の傷」と「心の病」で、説明しようと大胆に試みる。しかし、「心の傷」と「心の病」の方法自体が、検証的方法であるという矛盾を含み、せっかくの著者の試みを減じているのは否めない。従来の心理学の方法に疑問を呈し、批判したのだから、もっと著者の目指すべきことを主張してもよかったのではないかという意見もあった。

著者の主張を裏づけるものとして3自験例とオーダーメイドテストを示す。3事例で、動機づけ、特に、内発的動機づけと関連させて、ポジティブフィードバックが大切であることを示した。しかし、少々いきすぎなところもあった。このようなエラーも記述し、そのエラーを肯定的な心理治療要因となったことをあきらかにした。エラーが、プラスになることは心理療法ではときにあることだが、そのためにはセラピストの誠実さと謙虚さなどの基本的な態度が必要である。著者にはこのような態度が備わっているのであろうと評価された。また、この3事例から考えられることは、心理療法における深さと幅であると指摘された。すなわち、著者のやり方は、どちらかというと浅く、広くの感じが強く、深さをどのように考えるかと問題にされた。心理療法は、必ずしも深ければよいというものでもなく、難しい問題を含んでおり、これらの点は、著者の今後の課題として残された。

オーダーメイドテストは、著者のポジティブフィードバックの大切さを検証するためにしめされたものである。4つの実

験はそれなりに、著者の考えを支持していた。これはこれなりに評価できるが、しかし、このような試みは、著者が、現象を忠実に記述していこうとする立場と矛盾し、一貫性を欠くことになりかねないと指摘された。

むしろ、著者のオリジナリティは個人的当為という概念であろう。当為とは「そうあるべきこと」と一般的、普遍的なものであるが、それを「個人にとってそうあるべきこと」としたことこそ本論文の価値ある点であると評価された。この個人的当為をもっと前面にだせばもっとよかったであろうが、このままでも高く評価できると意見の一致をみた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成 11 年 12 月 22 日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。